

「教室の外で — 2009 年度」

学校教育（教育学）・山本久雄

1. 授業の概要

火曜 2 時限に大講義室で実施，受講生は 146 名（学校教育教員養成課程及び特別支援教育教員養成課程 1 回生 128 名，それ以外 16 名）である。授業は教員免許状取得のための必修科目であり，従来の「教育システム論」を名称変更したものである。

この授業で扱う内容は，学校での指導・学習の成り立ちに関わる基本的事項であり，専門的職業人としての教員の視野を広げるうえで重要な内容である。ただ，その内容は，1 回生にとっては直接経験の裏打ちを持たず，なじみにくい。そこで，例年通り，教室内で教員と児童生徒との相互作用（指導・学習）が安定的に（不確定・不安定要因に左右されずに）行われるために「教室の外で」どのような配慮・取組が行われているか，という視点で内容を構成してみた。受講生には，最初に「感動」や「勇気」を呼び覚ます内容ではないこと，受講生相互の討論や主体的考察の前提となる基礎知識を獲得する授業であることを告げた。

例年同様，毎回，ハンドアウトを配布し，そこに内容の概略を示すほか，関連法規の条文，政府審議会の答申，関連新聞記事，統計調査の結果等を載せた。また，ハンドアウトには要所要所に空欄を設け，そこに重要語句を記入させることにより緊張の持続を図った。また，展開が上滑りとなることを避けるため今年度はあえてスライドの使用を控え，その画面もハンドアウトに取り込んだ。そして，毎回の授業の最後に小紙片を配布し，総括を記して貰った。

2. 本年度の新たな試み

(1) GPS (Global Positioning System)

本年度は科目名称が変わったこともあり，改善に向けた工夫・取り組みをいくつか心がけた。一つは，各回の冒頭に，これから学習することが「教室の中」での指導

・学習のどの局面に関わる配慮・取り組みかをていねいに説明したことである。これは，あたかも GPS（全地球的測位システム）で自分の現在位置を確認しながら目的地に向かっているようなもの，或いは「水先案内人」が持つ視野・見通しを「航海者」も共有し，情報の海の中をともに目的地に向け航行するようなものである。いずれにせよ，そうすることで広い視野や進むべき方向の中に個々のトピックを位置づけ，個々具体的な取り組みの意味や存在理由を確認した上で学習することができるはずである。これにより，学習における「興味」（学習意欲）や「理解」（学習成果），「資料の読み返し」「参考情報の閲覧」（学習行動）が改善されることを期待した。

(2) 実態・データを示す

「教育に関する社会的，制度的又は経営的事項」は，それらに関わる理論や法的な枠組みとともに，実態を把握することによって生き生きとイメージできる。今年度は特に文部科学省（関連機関），総務省統計局の web サイトの統計調査の結果，新聞記事などを URL とともに意識的にハンドアウトに取り上げ，さらに発展的学習のための関連 URL を載せた。これにより，理解がより確かなものとなり，発展学習が実質的に容易になることを期待した。

3. 検証と課題

(1) 小紙片

例年通り，毎回の授業の終わりに小紙片を配布し，そこに総括の記入を求めた（具体的には，「今日学んだこと」，「今日の授業で最も印象深かったこと」等の指示を出した）。それは授業者と受講者とのコミュニケーションの一環であり，次回授業の動機づけに大いに関係するが，それはまた毎回の授業の検証の貴重な手段でもあった。それにより，受講者の息吹を感じながら，特に説明が不足していた事項の特定が可能

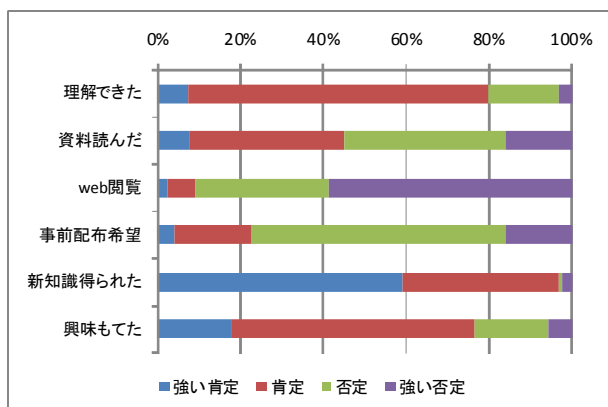
であった。

なお、この小紙片には出席管理のため記名を求め、記入内容は3段階で評価することを通知していた。従って、そこに記載された内容はそうした前提で読み込む必要がある。

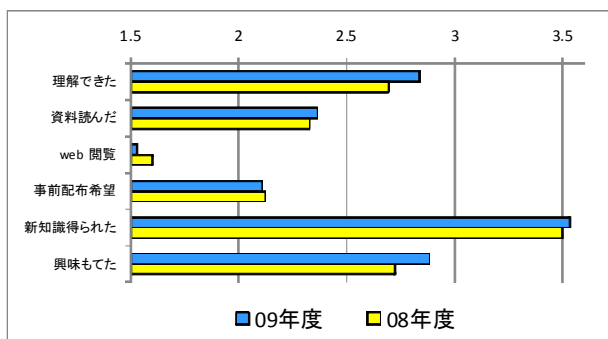
(2) アンケート

例年通り授業最終日に無記名で例年と同じ項目を質問し、4段階（「強い肯定」、「肯定」、「否定」、「強い否定」）で回答を求めた。質問は、①学習の成果を問う「授業内容が理解できたか」、「新しい知識を得られたか」、②学習意欲の喚起の成否を問う「興味ある内容だったか」、「ハンドアウトの事前配布を希望するか」、③自発的な学習行動の促進の成否を問う「ハンドアウトを授業外で閲覧したか」、「関連URLを閲覧したか」である。

その集計結果（構成比率）は以下の通りである。



これらを数値化し（それぞれに4, 3, 2, 1を乗じ、その総和を回答数で除す）、昨年度と比較してみると以下ようになる。



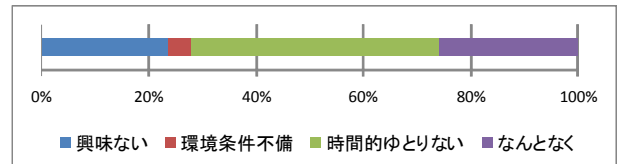
ここから、成果（理解、新知識）、内容に対する興味喚起で改善が見られた、と強弁してみてもそれは空しい。自発的学習（意欲）を示す指標である関連 web ページの閲覧状況や資料の事前配付の希望の状況

は、相変わらず、この授業に受講生が積極的・意欲的に取り組んでいた訳ではないことを示している。これは、基本的に例年の趨勢と符号し、少々の工夫、改善策だけでは太刀打ちできない、強固な、より本質的なものに根ざした状況といえる。これは、報告者にとっては積年の課題である。

ただ、これはこの授業についてのみ言えることではないであろう。近年の、単位の実質化をめぐる様々な取り組みの前提として、こうした状況が広く問題として共有されていたと思われる。では、どうしたらいいか。「教室の外」の学習を促すためには先ず強制が効果的である。ただ、それは意欲を喚起するものではない。改善のためには、個人の改善努力とともに、より組織的な取り組みが必要であろう。そこで「web ページを閲覧しなかった理由」に注目してみたい。

(3) 「web ページを閲覧しなかった理由」

「web ページを閲覧しなかった」と回答した人にその理由を尋ねたところ、以下のような回答を得た（それぞれの理由の構成比率）。



このうち、「興味ない」と「なんとなく」は似通った理由であり、先ずは授業者個人の奮闘努力をまつべきものだが、「時間的ゆとりがない」が最多であることの背景に何があるのだろうか。通常、この種の状況で「時間的ゆとりがない」を挙げるときは、やるべきだと分かっている、興味がない訳ではない、しかし、他に優先すべきこと・優先したいことがある、ということであろう。「他に優先すべきこと・優先したいこと」には多様なことが含まれる。また、そのような状況の背景には学部のカリキュラム構造、免許要件の枠組み、そしてわが国の高等教育が抱える構造的な要因があるかもしれない。

先ずは自身の「授業力」の問題であることは自覚しつつも、今年度の授業の検証において、授業の成否には多様な要因が関係していると思うに至った。